

詠む広場

毎日俳壇

西村 和子 選

井上 康明 選

片山由美子 選

小川 軽舟 選

立葵スクールバスの窓覗き

美作市 清水 美和

△評▽咲き上ったタチアオイの花
が、バスの窓から見たことを擬
人化して効果的。生徒たちの感動
の音が聞こえてくるようだ。
向日葵の群にあさつて向く花も

紀の川市 中島 走吟

△評▽「あさつてを向く」には見
当違いの方を向く意味がある。こ
の表現に俳諧味を感じる。
花つけしまの胡瓜も売られけり

神戸市 中林 照明

浮島のごとく墓地あり青田風

山形 佐藤美和緒

風見鶏喘ぐ炎暑の坂の街

加古川市 伏見 昌子

石蹴つてみても変らぬ暑さかな

岡山市 仲野 恒彦

電柱の影さへ頼る炎暑かな

福知山市 衣川 登代

頂上のくづれて落ちしかき氷

松山市 井上 保子

料理の手休め神輿を出迎ふる

弥富市 富田 範保

噴水や男はいつも待たされて

日高市 金澤 高栄

水底の遡る世から蓮の花

奈良 加藤 利光

△評▽ハスは水面から花茎を伸ば
して咲く。水底の泥の混ざり合う
汚濁の世界から、この世ならぬ極
楽浄土のハスの花が咲く。
悪友の一人逝きたり夕端居

真岡市 小川 充

△評▽端居の涼しい風に吹かれ、
親しい友の死を悼む。さまざま
楽しい思い出とともに。
まぎれなく老人の顔黒揚羽

宇陀市 泉尾 武則

扇風機眠りの淵へ落ちてゆく

松原市 平畑 和子

八十路にも性根試さる大暑かな

須賀川市 伊豆 周治

生垣の上に日光浴の蛇

町田市 枝澤 聖文

サイダーの泡たちあがる真昼かな

鴨川市 西宮 鉄雄

返信はいつも絵葉書夏見舞

延岡市 河野 正

帰省子へ草ぼうぼうの田圃かな

真岡市 下和田真知子

風薫る野鳥図鑑に糞の痕

宇治市 濱岡 学

決断を明日へ持ち越す酷暑かな

君津市 本吉 孝雄

△評▽あまりの暑さで思考力が鈍
りがち。「酷暑」は季語として使
われてきたが、気象庁が今年、予
報用語として「酷暑日」を設けた。
梅雨の夜や目覚めては脈確かめて

福島 渡辺 俊子

△評▽寝苦しさは何度も目が覚め
てしまう。体調の不安がみずから
脈を確かめるといふ動作に。
梅雨明けや噴煙あがる桜島

福岡 手島喜美江

西日中路面電車の影もゆく

広島市 谷口 一好

新涼の風六甲山のふもとまで

明石市 村上 絹恵

落蟬を拾へばジジッと声を立て

和歌山市 武友 朋子

蟬鳴くやピアノの音の止んである

東京 吉田 芳子

サンダルの片方残る秋の浜

松山市 村重 香霞

夏の灯や一冊の本読む無言

東京 青野 曆

スイカ食ふ種の弾丸皿へ飛ぶ

茅ヶ崎市 森 全太郎

炎天へ胸突き出して応援歌

高山市 直井 照男

△評▽夏の甲子園でもおなじみの
応援風景。学ランだろう。「胸突
き出して」が明快な写生になっ
ている。
海の日や火花を散らす溶接工

可児市 鷲津 誠次

△評▽休日返上で仕事なのだ。海
に行きたいなあと心の中でつぶや
くのが聞こえてきそう。
一叢の雲の離れぬ青嶺かな

野田市 押江 成行

日日草朝十分のストレッチ

さぬき市 景山 典子

梅雨寒のクリームシチュー頼まれる

米子市 長田 遼平

冷麦はいりこ汁なり母遠し

北九州市 土居 康二

水割りのグラスのしづく夜の秋

東久留米市 矢作 輝

降り立ちし単線の駅草いきれ

奈良 高尾山 昭

夏の朝護岸工事の土緒し

京都市 根来 滋

打ち水や小紋の裾をひよいと上げ

三鷹市 鶴田 朋行

加藤 治郎 選

水原 紫苑 選

伊藤 一彦 選

米川千嘉子 選

白線の内側に立つ その先は海だったかもし
れない朝だ 名古屋市 森本 有

わたしからあなたに罪は渡せずに窓が一つも
ない懺悔室 名古屋市 よだか

△評▽古いヨーロッパの教会の告解室は小
さな密室で互いの目しか見えない。「あな
た」すなわちイエスはそこに。

かみあはぬ会話よりも耳遠き友は電話でハッ
ピーバースデー歌ふ 京丹後市 山副美佐子

△評▽古い友人で、率直なやりとりが許さ
れる仲なのだ。ほほ笑ましいというにとど
まらず、温かく心に響く声が聞こえる。

言葉への信頼 染野太朗

うたは奏でる

新上達也歌集『あなたを待つていな
い公園』(左右社)に注目している。
・太陽が川で沈んでひかっている架空の犬
を連れて歩いた
夕焼けの川沿いを散歩するなら犬を連
れているのがいかにもふさわしいと感
じ、そこにはいない犬を想像しながら歩
いている。しかし「犬を想像しながら」
とか「犬を連れてくるような気分」な
どとは言わない。「架空の犬を連れて」
と表現する。それによって、犬がいるこ
とを半ば信じているようなニュアンスが
出ているように思う。空想と現実のあい
だにしっかりと線が引かれてはいるが、
しかしその現実が、言葉の力によってほ
んのわずかに書き換えられている。
・喫煙は、あなたにとって高めます。よ
り強めます。ひとつとなりまします。
たばこのパッケージにある警告表示の
一部を欠落させ、それをつなぎ合わせる
ことで一首が成り立っている。結果とし
てあらわれたのはむしろポジティブなメ
ッセージだ。言葉の陰に隠れていた言葉
を、言葉が照らし出す。
・ふだん喋る機会のない人からペンを
借りおめでとうと書いて返した
おめでとうという言葉自体をペンの持
ち主に贈ったのではない。その言葉を書
いたことによって特別な価値を得たかの
ようなペン、それを返したわけだ。意味
の伝達を超えたところにも言葉の力を認
めているからこそ可能な行為だろう。
これらの歌に私は、言葉そのもののへの
信頼を感じる。その信頼に、ひとりの詠
み手として励まされるような気持ちにな
った。
(そのの・たろう)歌人

賞＝小川未夜子「Be clear」(小
降る)書評、牛尾今日子「壊れ
(瀬口真司歌集『BEAM』書評)
俳句評論賞＝山根もなか「俳句は
一知覚・形式・運動の条件」
俳句協会年度作品賞＝庄子紅子